

# 機械翻訳の使用は「悪」なのか

— ドイツ語話者の複言語性からのアプローチ —

(Ist der Gebrauch maschineller Übersetzung „schlecht“?: Ein Ansatz aus der Perspektive der Mehrsprachigkeit deutschsprachiger Sprecher)

李在鎬 Lee, Jaeho (早稲田大学 Waseda-Universität)

村田裕美子 Murata, Yumiko

(ミュンヘン大学 Ludwig-Maximilians-Universität München)

三輪聖 Miwa, Sei (テュービンゲン大学 Eberhard Karls Universität Tübingen)

## 要旨 / Zusammenfassung

本研究は、ドイツ語を母語とする日本語学習者 57 名の機械翻訳 (MT: Machine Translation) 使用に伴う罪悪感について、複言語能力との関係から考察するものである。アンケートによる量的・質的分析の結果、日本語能力の違いによって MT 使用の方法や罪悪感の有無に差が見られた。日本語能力が低い学習者は単語レベルで MT を使用し、罪悪感はほとんどなかったが、「中」レベル以上の学習者は文章レベルで利用し、「努力不足」や「不正」と捉えて罪悪感を抱く傾向があった。一方、複言語能力が高い学習者は MT に対する罪悪感が少なく、MT を学習支援ツールとして肯定的に捉えていた。本研究は、MT 使用に関する意識が学習者の言語観や言語背景と密接に関係していることを示し、今後の日本語教育では MT の利点と限界を理解させる「機械翻訳リテラシー」の育成が重要であると主張した。

Diese Studie untersucht das Schuldgefühl beim Einsatz maschineller Übersetzung (MT) durch 57 japanischlernende Muttersprachler\*innen des Deutschen im Zusammenhang mit ihrer plurilingualen Kompetenz. Eine quantitative und qualitative Analyse von Fragebogendaten zeigt, dass sich je nach Japanischkenntnissen Unterschiede in der Art der MT-Nutzung und im Erleben von Schuldgefühlen ergeben. Lernende mit geringeren Sprachkenntnissen nutzten MT hauptsächlich auf Wortebene und empfanden kaum Schuldgefühle. Dagegen verwendeten Lernende mit mittleren oder höheren Kenntnissen MT auf Satzebene und neigten dazu, ihre Nutzung als „mangelnde Anstrengung“ oder „unrechtmäßiges Verhalten“ zu bewerten. Plurilinguale Lernende hingegen zeigten weniger Schuldgefühle und sahen MT eher als unterstützendes Lernwerkzeug. Die Studie kommt zu dem Schluss, dass Einstellungen zur MT-Nutzung eng mit sprachlichen Vorerfahrungen und Sprachlernüberzeugungen verknüpft sind, und plädiert für den Aufbau einer „MT-Literacy“, die Lernenden hilft, Vor- und Nachteile von MT in der Japanischdidaktik zu reflektieren.

## 1 研究背景と目的

2010 年代後半に登場したニューラル翻訳、2020 年代の前半に登場した GPT モデル、そして、2023 年末に普及し始めた ChatGPT などの生成 AI は、いずれも人工知能研究の文脈で位置づけられ、機械翻訳 (Machine Translation: 以下では MT)

に深く関連するトピックである。こうした自然言語処理分野の成果として、MT は誰もが簡単に使えるツールとなり、その恩恵ははかり知れないものがある。とりわけ、日本の外国語教育の文脈で言えば、英語教育においてさまざまな論点を提示している。例えば、仕事のための英語学習は不要という意見（隅田 2022）や英語教育への積極的な導入を検討すべきだという意見（小田（編）（2023））、MT を外国語教育のパラダイムシフトの契機にすべきだという意見（李・青山（編）（2025））が研究者の間で提起されている。近年では、MT を利用した英語学習のガイドブック（山田 2025）までもが出現しており、まさに AI との共生が模索されるようになってきている。このような AI との共生や経済界を中心に本格的な社会実装が進む中、全体としては AI に対する肯定的な意見が目立つようになってきている。こうした動きは、AI 研究においては、大きな追い風になる。一方で、科学研究や教育研究の健全性を保つためには、反対意見や批判的意見も必要である。例えば、今から 10 年以上前になるが、Clifford et al. (2013) では、356 名のスペイン語の学習者と 43 名の教員に対して、2011 年に行った MT に関する意識調査の結果を報告している。調査の結果として、学習者の 76% が MT を使用したことがあると回答しており、そのうち 91% の学習者が語彙の意味を調べるためのソフトウェアとして使用していることを報告している。つまり、多くの学生がすでに MT を使用していることや使い方としては辞書のかわりとして MT を使用していることが明らかになった。また、書く活動と読む活動における補助ツールとして MT を使用している学習者が多いことも明らかにしている。一方、教員側では、8 割程度が MT の使用を何らの不正であり、言語学習の方法としては不相当であると捉えていることを報告している。もちろん、当時と現在では MT の精度そのものが異なるため、ダイレクトな比較は難しいが、MT の使用を「悪」として捉える見方が存在していたことがわかる。さらに言えば、論文化こそされていないが、多くの語学教師の中には、MT に対して積極的に否定はできないが、肯定もできないようなモヤモヤ感があるようにも見える。ただし、こうした批判的、慎重な見方は重要である。なぜなら、私たちは新しいテクノロジーが出現するたびに、肯定する意見と否定する意見の建設的な対話を通して、共生を実現してきたからである。

本研究では、多くの語学教師が感じるこのモヤモヤ感を解消するべく、まずは日本語学習者の実態を把握することを目的として、以下の調査を行った。

### 【MT の使用に関する調査デザイン】

1. 【何を】日本語学習者が MT に対して、どのような意識を持っているのかを調査する。
2. 【いつ】2023 年 2 月

3. 【誰が・誰に】本稿の著者が質問項目とウェブフォームを作成し、勤務校の日本語学習者に対して協力依頼した。調査協力者は 57 名であり、全員が日本学を主専攻とする学習者である。
4. 【どうやって】Google フォームを使ったウェブアンケートとして実施した。質問は日本語と英語を並記した。回答は日本語でも英語でもドイツ語でも可にした。
5. 【どこで】ウェブ上で行った。
6. 【何のために】日本語学習者の MT に対する意識を調査することで、日本語教育分野における MT の活用の位置づけを再考するためである。

MT の使用に関する調査の第一報として、李ほか（2023）では日本語能力の高低と MT の使用状況を分析し、以下の 6 点を明らかにした。

1. 調査協力者 57 名中 56 名が日本語学習において MT を使用している。
2. 調査協力者 57 名中 43 名（75.4%）の学習者が複数の MT システムを併用している。
3. 日本語力が「低」の集団の特徴として、「日本語→ドイツ語」「ドイツ語→日本語」の単語レベルで MT をよく使う。
4. 日本語力が「中」の集団の特徴として、単語レベルでは MT はあまり使わず、文レベル、文章レベルで日本語とドイツ語を両方向でよく使っている。
5. 日本語力が「高」の集団では単語レベルでは使っておらず、文レベルにおいて「日本語→ドイツ語」の方向性で時々使っている。
6. 日本語力が「低」の集団においては、罪悪感はなく、「中」では罪悪感があると回答している。そして、「高」の集団では、「どちらとも言えない」と回答している。

1 の結果は、日本語力の有無に関係なく、ほとんどの学習者が MT を使用していることを示すものであるが、注目すべきは、2 の事実である。多くの学習者は MT の文章が誤りを含んでいることを理解しており、複数の MT システムを利用することで、こうした課題に対応していることが示唆される。そして、3 から 5 は MT の使い方は、日本語の習熟度と関連が深いため、習熟度に応じた使い方の指導が必要になることを示唆している。

さて、本稿では、李ほか（2023）の残された課題として、6 で示している「罪悪感」の問題を扱う。日本語学習者もつ「罪悪感」の実態を明らかにすることで、MT の使用をめぐる否定的な意見、語学教師のモヤモヤ感に対して何らかの示唆を与えたいと考えている。従って、本研究では「日本語学習において、MT を使用するの『悪』なのか」という問題提起を行い、日本語学習者のリアルな声と彼らが有する複言語能力の観点からアプローチする。最後に「機械翻訳リテラシー」の観点から考察を試みる。

## 2 問題の在り処：MTの使用と罪悪感の有無

本研究の調査では、「MTを使って授業などで課されるレポートを作成・提出することに対して罪悪感があるのか。」という質問をしており、以下の結果が得られた。

表1 MTの使用に伴う罪悪感と日本語能力のクロス集計表

		日本語能力			合計
		高	中	低	
罪悪感の有無	ある	4	7	2	13
	ない	9	6	10	25
	どちらとも言えない	9	5	5	19
合計		22	18	17	57

表1を見ると、日本語力が「低」の集団においては、罪悪感がないという回答が目立つが、日本語力が「高」の集団においては、「どちらとも言えない」という意見と「罪悪感がない」という意見が同数になっている。さらに、「中」の集団においては、「罪悪感がある」という回答がわずかに多いが、全体としては明確な関係性が読み取れない分布になっている。このことに関連して、李ほか（2023）では日本語力が「低」の集団において罪悪感がない理由として、先述したとおり、この集団が「単語レベルで日本語をドイツ語に翻訳したり、ドイツ語を日本語に翻訳したりする際にMTをよく使う」傾向にあることに注目している。これは、いうならば、辞書のかわりとしてMTを使っているわけであり、辞書の使用に罪悪感という感情は芽生えないことに原因があると考えられる。この分析は、日本語力が「低」の集団に関しては納得できる説明であるが、「中」や「高」の集団に対しては納得できる説明ではない。おそらく別の変数が関係している可能性がある。

こうした問題を明らかにするため、二つの分析を行う。一つ目は、学習者からの記述コメントの定性的分析、二つ目は、日本語学習者の複言語能力との関連性の定量的に分析である。この二つの分析をもとに「MTの使用は『悪』なのか」という問いに対する本研究の立場を明らかにする。

## 3 データと分析

### 3.1 罪悪感の有無に関する定性的分析

本研究の調査では、MTの使用をめぐって罪悪感の有無について答えてもらった後、その理由を自由記述式のアンケートとして調査した。なお、理由の記述は、日本語、英語、ドイツ語のいずれかで書いても可にしている。以下、学習者から出された意見の全文を示す（原文ママ）。

・罪悪感があると回答した理由

意見 1 : ちゃんと頑張らなかつた感じがする

意見 2 : 自分で翻訳できなかつたんです。

意見 3 : I feel like I am cheating and that it would benefit me more if I would not use it but try to find out the translation by myself

意見 4 : I feel a bit guilty

意見 5 : It feels like I am not doing all the work myself, and I feel like I don't learn as much.

意見 6 : 自分の能力で書きたいです。言葉を一つ二つ翻訳するのは大したことないですが、ほとんどは自分の努力で書きたいんです。

意見 7 : Ich mag es mich in meinen Texten mit meinen eigenen Worten auszudrücken. Diese Möglichkeit wird mir dadurch genommen. Außerdem will ich die japanische Sprache selbst beherrschen und mich nicht auf Programme verlassen müssen.

意見 8 : Because it is expected that I wrote it myself in Japanese.

意見 9 : i would be scared of being found out

意見 10 : it does not reflect my personal skill which I am supposed to show with a report.

意見 11 : It feels like cheating.

意見 12 : Im pretty sure that i can write it myself but i am too lazy to do so

意見 13 : If I copy the machines answer it is not my own intellectual property. It feels invalidating that a machine seemingly is smarter than you Sometimes. I question the purpose of learning a language and feel like I am wasting my time.

・罪悪感がないと回答した理由

意見 14 : Because I do not translate everything. In general I do not use a lot of words I don't know. I basically just use it to double check Kanji as I tend to forget them. Additionally, the machines do not always translate correctly so essentially it is still my work.

意見 15 : I don't write my whole article with a translator, I most certainly search for 2 or 3 words.

意見 16 : The teachers do not always have the time to clarify all questions. This way I can make things understandable to myself while learning.

意見 17 : Ich nutze einen Übersetzer, um zu überprüfen, ob mein japanischer Text auch in einer anderen Sprache Sinn ergibt. Manchmal auch, um mir anzuschauen wie ein Satz aussehen könnte, wenn ich etwas Bestimmtes in meinem Text aussagen möchte. Dann überarbeite ich alles bzw. schreibe den Teil selbst neu. Ich sehe das als Lernprozess.

意見 18 : Because I am still learning and taking baby steps or helping is not bad neither it is considered cheating

意見 19 : Though machine translation improves rapidly, it's still full of syntactic and semantic errors. Thus, I would only use it to speed up the process of writing and use it as a general tool to get a quick overview about complex texts. Generating translations without further editing would be insufficient.

意見 20 : Because I rarely ever use it

- 意見 21 : You can never fully use it to write an entire report, but I think it is useful when I am not sure about a particular phrase etc. It is a tool that can help you write and learn the language, and not device for cheating.
- 意見 22 : Machine translation is one of the tools that we can use instead of dictionary, and the future is for it anyway, so it is better to learn how to use it, in the same time, I don't take the translation just copy-paste, I have to read it and be sure that it is the right meaning and then use it, but it save a huge time.
- 意見 23 : Die Sprache ist nur ein Zeug. Das Hauptziel der Kommunikation ist gegenseitig zu verstehen.
- 意見 24 : I only use machine translation for control. I use it mostly in parts where I have difficulties. It is merely a tool for me to improve my performance.
- 意見 25 : At the end of the day it helps me to learn the language better. That's why I study it, so that I can learn as much as possible. Therefore I don't see why I should feel guilty.
- 意見 26 : レポートを書くことが遅れてしまうよりすぐにかいたほうが便利です。
- 意見 27 : Machine translations are a tool. I don't see any sense in feeling guilty of using them. Of course, like every tool, if you use it with bad intent (like cheating), you will of course feel guilty using it.
- 意見 28 : Ich verwende Maschinelle Übersetzungen lediglich für Texte, welche mich selbst zu viel Zeit kosten würden zu übersetzen, die ich für den Text nicht habe. Finde ich einen Japanischen Text, der darauf zutrifft, so habe ich zwei Optionen, entweder ich überspringe den Text, verliere somit eine möglicherweise wichtige Quelle, welche die Arbeit im ganzen sehr viel weiter bringt, oder ich nutze maschinelle Übersetzungen um den Inhalt des Textes schneller (und somit im Rahmen der zeitlichen Begrenzungen der Arbeit) zu verstehen und die Arbeit rechtzeitig abgeben zu können. Zugegebenerweise gibt es außerhalb der Zeit, die ich für die Arbeiten nutze noch die Möglichkeit mein Japanisch weiter zu verbessern, dies sprengt jedoch den zeitlichen Rahmen bis wann ich meine Arbeiten fertig haben muss und hilft "nur" langfristig und nicht für die Arbeiten, die ich zu der Zeit schreiben muss.
- 意見 29 : It's easier to express your thoughts that way because sometimes your skills are too limited
- 意見 30 : Ich sehe nicht warum man sich schuldig fühlen sollte. Es ist wie in einem Wörterbuch nachzuschlagen. Ich finde es ist nur schlau sich den Hilfsmitteln zu bedienen, die einem zur Verfügung stehen. Außerdem ist es ja nicht verboten.
- 意見 31 : As machine translation became part of the day to day life I see no fault in incorporating its use into the process of translation and see the supplementation of translation through one's own proficiency with machine translation and vice-versa as the natural next step in language translation.
- 意見 32 : It is a tool to help compare/ improve my own translation.
- 意見 33 : It's a natural process of learning a language, so I feel it's no different from using a traditional dictionary. It can also help you communicate ideas that are currently beyond your level.

意見 34 : When using it just to look up words I don't see how it is any different from using a dictionary, except that it is more practical. When using it to translate full sentences or passages however, I don't think that is very useful to your learning. Sometimes I write the passages myself and then use machine translation to check if I made any mistakes or to see alternatives to what I wrote.

意見 35 : In real life you also have the option to look up words. Also when writing a report you can not explain with gestures like you would do, when speaking to a person.

意見 36 : Machine translation is a tool just like a dictionary. It just simplifies the process itself. In a quick paced world I believe it's necessary for language learners to keep up with digital advances. I don't feel guilty and I might even believe it is necessary.

意見 37 : It is just a tool, just like a dictionary. Also I would never just copy paste the translation, I always check it with my own language skills and rework it.

意見 38 : I don't copy the translation itself but trying to get an idea about grammar structures I haven't thought about

日本語学習者からの意見は次のようにまとめることができる。まず、罪悪感があると回答した理由として、「自分自身の努力や能力を否定する感覚」が多く挙げられた。「ちゃんと頑張らなかった感じがする（意見 1）」「自分で翻訳できなかった（意見 2）」という意見に代表されるように、自己の能力不足や怠惰を理由に罪悪感を抱くことが多い。また、「不正をしているような気持ちになる（意見 11）」という意見や、「自分のスキルを示すべきレポートで、本来の能力を反映していない（意見 10）」という意見も見られた。さらに「機械が自分より優れていると感じて、自分の知的価値を疑問視する（意見 13）」という心理的抵抗が認められ、「自分は無力だと感じ、自分がこれまで語学学習にかけてきた時間は無駄だったのではないか。学ぶ目的がわからなくなる（意見 13）」とあるように、MT を使うことで自信を喪失し、学習意欲やモチベーションが低下している様子も見受けられる。自分の言語能力に自信がないことが罪悪感に繋がる可能性もあるように思う。

一方、罪悪感がない理由が多かったのは、「MT を辞書などと同じ学習支援ツールと見なす」考え方である。「ただ単に辞書を引くのと変わらない（意見 30）」という意見や、「MT はツールであり、使用することで言語学習が進む（意見 25）」という積極的な捉え方が多かった。また、「完全な翻訳ではなく、一部分だけを参照して自分の文章を改善するための補助手段として使う（意見 14, 意見 24）」という意見も多数あった。さらに、「MT を使って学習プロセスを効率化することは現代的な学習方法として自然であり、罪悪感を感じる必要はない（意見 31, 意見 36）」という意見も特徴的であった。

以上のことから、罪悪感がある学習者は、自己の努力や能力評価に関して MT の使用が負の影響を与えると考えている。一方、罪悪感がない学習者は、MT を自己の学習プロセスの一部として位置付け、効率的で現実的な学習手段として肯

定的に評価していることが分かった。このような差異は、学習者が言語習得に対して持つ価値観や認識の違いを反映していると考えられる。

### 3.2 罪悪感の有無に関する量的分析

罪悪感の有無と、MT の使用頻度の関係性を確認するため、両変数の度数をもとにクロス集計を行った。

表 2 MT の使用頻度と罪悪感の有無のクロス集計表

		罪悪感の有無						合計	
		ある		ない		どちらとも言えない			
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
MT の使用頻度	あまり使わない	0	0.0%	0	0.0%	1	5.3%	1	1.8%
	時々使う	8	61.5%	13	52.0%	11	57.9%	32	56.1%
	よく使う	3	23.1%	8	32.0%	6	31.6%	17	29.8%
	とてもよく使う	2	15.4%	4	16.0%	1	5.3%	7	12.3%
合計		13	100.0%	25	100.0%	19	100.0%	57	100.0%

表 2 で注目すべきは罪悪感の有無と使用頻度には顕著な傾向は観察されない点である。つまり、MT の使用に関して罪悪感があったとしても、MT の使用を抑制しないということは、罪悪感を持ちながらも使用していることが示唆される。

罪悪感の有無に関係する要素として、ドイツの日本語学習者が有する複言語能力に注目する。具体的なデータとして李ほか (2023) の調査では、「日本語以外に使える B1 以上の外国語書いてください。」という質問をしており、その結果、1 名をのぞく 56 名の学習者が日本語以外の何らかの外国語の運用能力を持っていると回答している。

表 3 B1 以上の運用能力をもつ外国語数の度数分布表

外国語数	度数	%
1 言語	18	32.1%
2 言語	20	35.7%
3 言語	14	25.0%
4 言語	3	5.4%
5 言語	1	1.8%
合計	56	100.0%

表 3 からは、日本語学習者の多くが日本語以外の言語も使用する複言語話者であることが示される。なお、「日本語以外に使える B1 以上の外国語を挙げてく

ださい」という質問への回答から、英語、フランス語、中国語、スペイン語などの言語が挙げられた。彼らが有する複言語性と罪悪感の関係性を検討する両変数をクロス集計した。

表 4 罪悪感の有無と B1 以上の運用能力をもつ外国語数のクロス集計表

		B1 以上の運用能力をもつ外国語数					合計
		1つ	2つ	3つ	4つ	5つ	
罪悪感	ある	6	6	1	0	0	13
	ない	2	10	8	3	1	24
	どちらとも 言えない	10	4	5	0	0	19
合計		18	20	14	3	1	56

表 4 から「罪悪感がない」と回答している学習者は使用可能な言語数として、2 つや 3 つのところに集中しているが、「どちらとも言えない」「罪悪感がある」と回答している学習者は言語数が 1 つや 2 つのところに多く分布していることが確認できる。この分布をより明確に捉えるため、罪悪感の有無を従属変数、B1 以上の運用能力をもつ外国語数を独立変数にした一元配置の分散分析を行った。

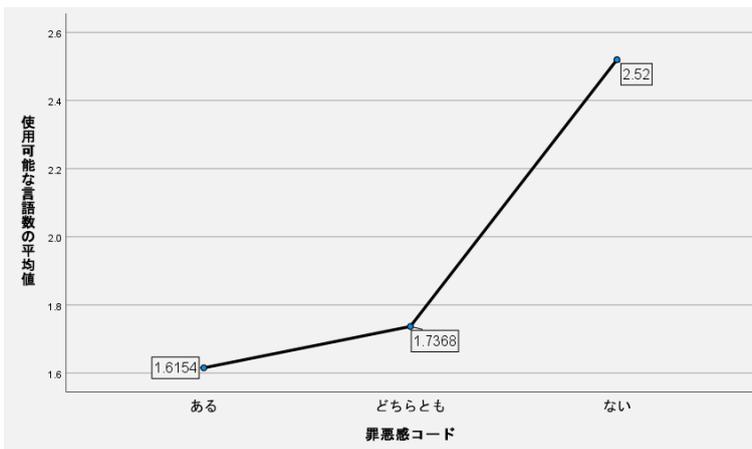


図 1 罪悪感の有無による B1 以上の運用能力をもつ外国語数の平均値

図 1 が示すとおり、「罪悪感がある」「どちらとも言えない」と回答した学習者に比べ、「罪悪感がない」と回答した学習者は高い複言語能力を持っていることが明らかになった。分散分析の結果としても罪悪感の有無と外国語数には有意な差が見られた ( $F(2,54)=5.653, p<.001, \eta^2=.232$ )。この結果は、複言語能力が高い話者ほど、罪悪感なく MT を使用している可能性を示唆している。

## 4 考察

これまでの分析によって複言語性の度合が罪悪感の有無に関して、有用な説明変数として機能していることが示されたが、このことを外国語教育の文脈で考察する必要がある。この課題に対して、本稿では、欧州地域で広く共有されている複言語主義の観点から検討する。

欧州評議会（Council of Europe）によってまとめられた「ヨーロッパ共通参照枠（CEFR: Common European Framework of Reference for Languages）」は学習と教育と評価を包括的に扱っている言語教育のフレームワークである。CEFR のユニークさは以下の一文から確認することができる。「CEFR は学習者を言語使用者としてみることで、そして社会的存在としてみることで、そしてそのことを通して言語をコミュニケーションの道具としてみなし、学習の対象としないことで、革新的な立場を示している」（欧州評議会（編）2020: 9）。CEFR では、学習者を社会的な行為者として捉えている。そして、ことばの学習は、そのものが目的にはならず、あくまで社会参加の手段として位置づけている。

こうした CEFR を支える理論面の柱として、「行動中心アプローチ（Action-Oriented Approach）」と「複言語主義」がある。まず、「行動中心アプローチ」の考え方は、「言語学習が学習者を現実の生活のコンテキストの中で行動できるようにすること、自分の考えを表現し、様々な課題を遂行することに向けられるべきだ」という点にある（欧州評議会（編）2020: 9）。「行動中心アプローチ」の考え方で興味深いのは、「社会的存在」である学習者を「学習過程に関与させることを意味し」ている点である。つまり、学習者が能動的に自分の持っている資源を使用せざるを得ない学習環境を創出することが求められている。同アプローチは、学習プロセスにおける学習者間のやり取りを通じて「意味を協働構築していく」という協働作業的性格を持つと説明されている（欧州評議会（編）2020: 10）。さらに、意味の構築は「言語横断的に行われ、そして使用者/学習者の複文化的レパートリー/資源に委ねられ」、複数の言語や文化などのレパートリーをフル活用して行われるのである（欧州評議会（編）2020: 10）。これは、CEFR を支えるもう 1 つの理論的な柱である「複言語主義（plurilingualism）」にも繋がるが、複言語主義は多言語主義（multilingualism）と異なる側面に焦点を当てている。多言語主義は、一つの社会に複数の言語が存在している状態を社会レベルの言語多様性として尊重し、促進するのに対し、複言語主義は、個人の中に複数の言語が共存している状態を個人レベルの言語多様性として尊重し、促進している。その上で、Beacco & Byram (2003: 8) は「複言語能力」を「個人が複数の言語を多様な目的のために使うことができる能力」と定義しており、具体的には以下のような能力をさす。

1. 一つの言語あるいは方言（変種）から他の言語にスイッチする。
2. 自分の言いたいことを一つの言語（方言あるいは変種）で表現し、他の人が他の言語で話すのを理解する。
3. 幾つかの言語（方言、あるいは変種）を利用してテキストの意味を把握する。
4. 共通の国際語の蓄えの中から新しい装いの語を認識する。
5. 共通の言語（方言、変種）を話さない人達の間を、例えば自分がごく一部しか知識がなくても仲介する。
6. 自分が持つ言語資材・技能を全て動員し、代替表現を試みる。
7. パラ言語（ミミック、ジェスチャー、顔の表情、など）を総動員する。

李（2024）では、AI時代の外国語教育が目指すべき方向性として、4つを提案しているが、その中に「単言語中心の外国語学習から複言語能力の価値を受容する外国語学習へ」という方向性を提案している。これは、AI時代の外国語教育における方向性としてもっとも大切なことであると述べている。

一つの言語を流暢かつ正確にあやつることを重視する言語能力観（単言語主義）と、一つ一つの言語技能に関しては多少の起伏はあるものの、個々人が持つ多様な言語資源を活用しながら課題を遂行する包摂的な言語能力観（複言語主義）の存在を認めることができる。前者の言語能力観に基づくのであれば、一つの地域には一つの言語が存在していれば良いという考え方のもとで一つの言語的手段を適切に活用していくことが重視される。となると、目標言語の語彙や文法を正確に覚えることに重点がおかれる。一方、後者の言語能力観に基づくのであれば、複数の言語を行き来しながら、意味の協働構築を行い、自身の表現を作っていくことが重視される。後者の言語能力観においては、自身が持つ複数の資源として、得意な言語や機械翻訳などのテクノロジーを使いながら新たな自己表現を作っていくことは現実的な選択肢になる。柳瀬（2022）では、外国語教育において母語の使用を禁止し、当該外国語の使用だけを求めることは非現実的であると指摘しており、複言語主義の価値を認識する必要性を論じている。柳瀬（2022: 14）では「外国語教育の目標を単一言語主義的にとらえて、学習者をどんな場合でも常に目標外国語で思考し理解・表現をする者とすることは現実に即していないし、公教育の理想としても維持し難い。複言語主義的な構想に基づいて、各人が自らの言語的・文化的リソースを多様にして的確に使い分けることが地球規模での公平性（＝英語覇権主義の克服）という点でも各人の具体的な生活場面（＝言語ゲームの多様性）という点でも望ましい」と述べており、複言語主義的発想の重要性を指摘している。

本研究の調査によって、複数の言語レパートリーを持つ日本語学習者であるほど、罪悪感なく、機械翻訳を使用している実態が明らかになった。このことは、複言語主義の言語能力観が、新しいテクノロジーに対しても柔軟であること、さらには言語学習のプロセスにおいて有意義なツールとして位置づけていることと、うまく対応している。日本語学習者の機械翻訳の使用は、彼らが持つ複言語能力か

ら自然発生的に生まれたものである可能性が示唆されているのである。そして、こうした見方の理論的妥当性を複言語主義から求めることができる。さらに、機械翻訳の社会実装が進む今日の言語教育の在り方を考える際、複言語主義が持つ意義は非常に大きいと言えよう。

## 5 今後に向けて：機械翻訳リテラシーと言語教育

2016年 Google 翻訳においてニューラル翻訳の仕組みが導入されてから MT ツールの翻訳精度は日々進化している。これにより学習者による MT の活用は日常化し、語学学習の現場において MT は事実上「新たな辞書」のような役割を果たしつつあるといえる。こうした現状から、近年、外国語教育の分野では「機械翻訳リテラシー (Machine Translation Literacy)」という新たなデジタル・リテラシー概念が注目されている。Bowker (2020) は機械翻訳リテラシーを「MT を批判的に使用できる能力」と定義しており、「MT の使用法を知ること自体は容易であるが、それを批判的に使いこなすには思考力が必要である」と述べているとともに、教育的観点からも、MT を効果的かつ倫理的に利用するスキルを育成する必要性を指摘している。

本稿でも取り上げた Clifford et al. (2013) の研究以降も多くの教師は依然として MT の使用を課題遂行上の「禁じ手」や不正行為とみなしてきた。教師のこうした認識は学習者にも影響する。多くの学習者にとって MT は「便利だが罪深い道具」として認知されていることの背景には教師の意識が関係している。O'Neill (2019) の研究では、大学の外国語学習者 310 名を対象に行った調査において、87.7%の学習者がレポート課題などでオンライン翻訳を利用しており、その中には授業で禁止されている場合でも使っていた学生が多数いたと報告している。つまり、表向き禁止されていても MT を使わざるを得ないほど、その活用は学習者にとって日常的かつ切実なものになっている。以上の状況を踏まえ、近年では「MT の利用を一概に禁じるのではなく、いかに適切に使わせるかを指導すべきだ」という共通認識が研究者・教育現場双方で高まりつつある。Ducar & Schocket (2018) は「もはや教員が MT の利用を禁止するのではなく、責任ある利用法を指導することが求められる」と提言しており、Bowker (2020) もまた語学教育に機械翻訳リテラシー教育を組み込む意義を強調している。

では具体的に、機械翻訳リテラシー教育では何を教えるべきか。Bowker (2020) は、国際ビジネス専攻の学生に対する機械翻訳リテラシー・ワークショップをデザインし、その中で次の要素を盛り込んでいる。プライバシー・機密保持や学術的インテグリティといった倫理面、アルゴリズム上の偏りへの理解、利用可能な MT ツールの種類や翻訳タスクの特性の紹介、そして適切な翻訳結果を得るために入力文を明確にする工夫の重要性などを盛り込むべき要素として挙げている。これらは、

学生が MT を「ブラックボックス」のまま使うのではなく、その出力を批判的に評価・活用するために必要な知識である。言い換えれば、機械翻訳リテラシー教育を通じて「MT を使いこなすためのメタ認知的スキル」を涵養しようという試みである。

さらに、適切な指導の下であれば MT の活用が学習成果を損なわないどころか向上させうることも示されている。O'Neill (2016) の実験研究では、大学 3・4 学期のフランス語学習者を対象に、オンライン翻訳ツールを用いた文章作成課題の成果を比較した。その結果、MT の使い方について事前指導を受けたグループの方が、MT 不使用の対照グループよりも高い成績を収めたことが報告されている (O'Neill 2016)。特に、Google 翻訳を使うグループでは事前トレーニングの有無で顕著な差が生じ、トレーニングありのグループは無しグループよりも高得点であった。これは、適切な指導を伴えば MT は作文の質を高めうること、そして機械翻訳リテラシーの指導が学習効果にプラスの影響を持ちうることを示唆している。こうした研究が示唆することは、MT の是非を巡って教員と学生の意識にずれがあるままでは、学生は独学で MT に頼り続けるしかなく、適切な活用法を知らないままでは学習効果を最大化できないということである。したがって、教育者側が能動的に関与し、MT の効果的な活用法や注意点を指導することが重要であると言える。

以上で示した先行研究の成果から日本語教育への応用可能性も考えられる。実際、近年では日本語学習者の間でも DeepL や Google 翻訳、ChatGPT といった高精度 MT が日常的に利用されており、作文の下訳や読解の補助に使う例も増えている (李・青山 (編) 2025)。しかし、もし教師から十分な指導やガイダンスが無ければ、学習者はそれらの使用に後ろめたさを感じたり、誤用による弊害に気付かないまま頼りすぎてしまったりする恐れがある。こうした課題に対し、機械翻訳リテラシーの指導は日本語教育の現場においても有効な支援となりうる。適切な指導の下でならば、学習者は MT を単なる「禁止された近道」ではなく正当な学習支援ツールとして位置づけ直すことができる。例えば、MT の長所と限界を理解させた上で使い方のコツを教えれば、学習者は安心して MT を活用できるようになり、MT の使用に伴う罪悪感の軽減にもつながるだろう。実際、Yuasa & Takeuchi (2024) の日本人大学生を対象とした研究では、英作文における MT の活用戦略の指導後、学生が MT を用いることへの抵抗感が減り、自信を持って利用できるようになったとの報告もある。このように、機械翻訳リテラシーの涵養は学習者の心理的負担を和らげ、MT を効果的に利用した言語習得を促進する教育的支援となり得ると指摘されている。

今後、日本語教育における適切な機械翻訳リテラシーの指導法を検討する上でも、本調査結果は有益な示唆を提供しうるだろう。

\*謝辞：本研究の調査に協力してくれた 57 名のドイツの日本語学習者に感謝する。本稿は科研費 19H01273、24K00078 の成果である。

## 【参考文献】

- 欧州評議会 2020. 『言語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 新能力記述文を伴う CEFR 随伴版』 Council of Europe Publishing. (Council of Europe (2020). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment—Companion Volume*. Council of Europe Publishing) , <https://www.goethe.de/resources/files/pdf328/cefr-cv-jap-mit-cover-finale-neu-v3.pdf> (12.07.2025)
- 小田登志子 (編) 2023. 『英語教育と機械翻訳』 金星堂.
- 隅田英一郎 2022. 『AI 翻訳革命—あなたの仕事に英語学習はもういらぬ』 朝日新聞出版.
- 柳瀬陽介 2022. 「機械翻訳が問い直す知性・言語・言語教育 — サイボーグ・言語ゲーム・複言語主義 —」 『外国語教育メディア学会関東支部研究紀要』 7, 1–18.
- 山田優 2025. 『ChatGPT 英語学習術 新 AI 時代の超独学スキルブック』 アルク.
- 李在鎬・村田裕美子・三輪聖 2023. 「機械翻訳をめぐる日本語学習者の意識調査 — ドイツ語圏日本語学習者のケース — (【特集】人工知能時代の日本語教育 — テクノロジーとの共生を目指して —)」 『早稲田日本語教育学』 35, 45–55.
- 李在鎬 2024. 「ChatGPT のインパクトと今後の外国語教育の方向性について」 『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』 21, 31–44.
- 李在鎬・青山玲二郎 (編) 2025. 『AI で言語教育は終わるのか? : 深まる外国語の教え方と学び方』 くろしお出版.
- Beacco, J. C. & M. Byram. 2003. *Guide for the Development of Language Education Policies in Europe: From Linguistic Diversity to Plurilingual Education*. Strasbourg: Council of Europe.
- Bowker, L. 2020. Machine translation literacy instruction for international business students and business English instructors. *Journal of Business & Finance Librarianship*, 25(1–2), 25–43. <https://doi.org/10.1080/08963568.2020.1794739> (12.07.2025)
- Clifford, J., Merschel, L., & Munné, J. 2013. Surveying the landscape: what is the role of machine translation in language learning?. *@tic. revista d'innovació educativa* Vol.10, 108–121.
- Ducar, C., & Schocket, D. H. 2018. Machine translation and the L2 classroom: Pedagogical solutions for making peace with Google translate. *Foreign Language Annals* 51(4), 779–795. <https://doi.org/10.1111/flan.12366> (12.07.2025)
- O'Neill, E. M. 2016. Measuring the impact of online translation on FL writing scores. *IALLT Journal of Language Learning Technologies* 46(2), 1–39. <https://doi.org/10.17161/iallt.v46i2.8560> (12.07.2025)
- O'Neill, E. M. 2019. Online translator, dictionary, and search engine use among L2 students. *CALL-EJ: Computer-Assisted Language Learning—Electronic Journal* 20(1), 154–177.
- Yuasa, M. & Takeuchi, O. 2024. Strategic use of machine translation: A case study of Japanese EFL university students. *AILA Review* 37(2), 215–240. <https://doi.org/10.1075/aila.24020.yua> (12.07.2025)